



移築が決まった家の思い出

浦城 いくよ

(井上靖長女・井上靖記念館相談役)



このたび父井上靖の自宅の書齋と応接間と書庫を旭川の井上靖記念館の横に移築することが決った。生誕の地旭川に父の作品の多くを書いた書齋が移ることになり、これ以上の喜びはない。

書齋に加えて作品が出来上るまでの過程で、沢山の方々に「こういう作品を書きたい」とか「こんな資料を探している」と話したり、出来上った詩を書齋から持って来て待っておられる編集者に朗読したり、酒宴を楽しんだ応接間も一緒に見ていただけるとは記念館の価値を更に上げることに繋がると思う。書齋と展示館が一緒にある記念館はそう多くはないだろう。まずまず中味の濃い旭川市井上靖記念館に発展して行くことを願っている。

東京都世田谷区にある井上の家は昭和三十二年十二月（父五十歳の時）にそれまで住んでいた品川区大井滝王子町から引越した。当時は南側の道を挟んで明るい疎林があり、五分も歩いた所には東京オリンピックで馬術競技が行われた馬事公苑がある。現在も桜と八重桜のみことな公苑である。表通りには新東宝の撮影所があった。お昼どきともなれば時代劇の衣装のままの俳優さん達が昼食を取るため歩いてきた。その四百坪の土地を買い求め家を建てた。

家の前に林があるということが母にとっては何ものにも代えがたい事のようにだった。仕事の合間に父が散歩が出来るのも気に入っていた。交通の便はバスしかなくて余り便利とは言えなかったが父はハイヤーで移動していたので母としてはあまり気にしてなかったようだ。

妹は六年間もいた小学校を最後の三ヶ月を残して転校させられ、今振り返るとも考えられないことだと言っているが、新居でのお正月を迎えたかったのかも知れない。父も養祖母であるおかのおばあさん（小説「しろばんば」ではおぬいばあさん）が一月に死去して二月に父親の任地である浜松の浜松尋常小学校へ卒業一ヶ月を残して転校している。当時の父母にとつては大した事ではなかったのだろう。

父の人生でも大変忙がしかった時期で、自分の仕事以外に気をまわす時間も余裕も関心もなかったと思われる。土地を探して買い求めて家を建てたのも、すべて母の仕事で父はおそらく土地も見に行かなかったのではないだろうか。すべて母に任せきりであった。

家の設計は父の友人で自伝小説「夏草冬濤」に出てくる「磯村」少年こと磯山正氏に依頼した。小説では東京から転校して来た良家の少年が洪作ら三人の同級生仲間を磯村家に招待しフランス料理をご馳走してくれる話が書かれていた。父はその頃の仲間とはその後親しく付き

合、家にもたびたび来られて一生涯の友人であったが、私たち家族にとっては一番親しくお付き合いした方は磯村少年だった。

磯山さんは沼津中学校を卒業後、東京美術学校（現在の東京芸術大学）建築科を卒業し住宅設計家として画家の住いを沢山設計されていた。絵も歌もとても上手な方だった。小説では「肩幅が広くがっしりとした上半身を持っていた」と描かれているがその通りだった。設計されたものもがっしりとしたビクともしないような家が多かった。

家が出来上ってから家具屋さんと呼んで居間や応接間の机やソファを作らせたり、絵を飾ったりされた。家の中をあちこちながめながら、毎日のように来られて好きな野球をテレビ観戦したり、一緒に食事をしたり作らせたマスターチエアーに磯山さんがゆったりと腰を下して楽しんでおられた姿がなつかしく目に浮かぶ。父は仕事に追われていたので磯山さんの相手どころではなかったが二人とも気にしていない様子だった。

天井のハリも柱も太くいかにも安心感があるので細かい所分らない父はこの家をすっかり気に入っていた。住宅の設計が大好きで「私は住宅の設計家になりたかった」とよく云っていた母には自分の理想とするこじんまりとした便利で働きやすい家とはだいぶ違っていたようだ。おそらく父は「磯山君にゴチャゴチャ口を出さないで任せてご覧」と言っただけにちがいない。

美術学校出身の人なので全体の家の姿とか線、壁やふすま、カーテンの色などほればれとする美しさがあったと思うが、主婦の求める家事への配慮は足りなかった。台所も広すぎて不便、電気の配線にいたっては工学部出身の人は全く違った。

よく母は自分の理想とする家の設計図を紙の

裏などに書いて夜遅くまで楽しんでいた。私の家も磯山さんの設計で三十年以上も住んでいる。土地探しから母に相談した。母の意見は「道から高い階段を登って入る家は雪が降ったり、年を取ってから外への出入りのたびの登り降りが危い」と言うので選んだのが南斜面の平らな土地だ。

手頃な広さで母の生活の知恵として新聞や郵便物は家の中へ直接入るようにとかピロティ式の車庫にしてあるので雨の降る日でも荷物を持つての出入りが雨でぬれないで出来るとかあげればきりがないがお金やレンジの置き場まで便利な知恵が一杯つまっている。サッシュも使われていない木造建築の家だが味があつて皆に誉められ気に入っている。



(井上邸応接間から庭を見たところ)

井上靖邸の書斎・応接間が旭川への移築が決まりました。

井上先生の書斎や応接間が旭川市に移築されることが決定しました。井上靖記念館としても、開館以来の大きな喜びですし、旭川市民にとつても、ビッグニュースには違いありません。

井上先生は、明治四十年五月六日、現在の旭川市春光六条四丁目で生まれました。軍医であった父親の転勤の関係で、井上先生は生まれて一年足らずで旭川を離れました。しかし、母親から、五月の旭川の美しさを聞いて、生誕の地・旭川には特別な思い入れを持っていました。

「母から自分の生まれた北海道の五月という時季が、長い冬がようやく去つて、百花が一時に開こうとしている一年中で一番美しい時季である」ということを、事に触れて言い聞かされているので、出生地旭川に対して私が幼時から持った印象は明るいものであった。雪と氷に閉ざされた長い冬の期間母の体内にはいついて、時が去つて花が開き始めるや、とたんに母の体内からとび出したということに、何となく私は、自分の人生の第一歩というものを考える場合、いつも満足なものを感じる」(『私の自己形成史』より)

この他にも、井上先生が旭川について書いている小説やエッセイ、詩は多くあり、井上先生にとつて旭川は特別な地であったのです。

今回、先生の書斎等を旭川に移すことを決断された井上家や井上靖記念文化財

団の方々も、井上先生の旭川への思いを大切にしていたのだと強く感じました。

当館が開館して十六年が経ちました。当館には井上先生の自筆原稿や貴重な資料が多く保管されています。当館はそれらの資料を用いて企画展を開催したり、講演会や読書会を開いたりしてきました。十六年間、この館に携わってきた人たちが積み重ねてきた足跡です。当館は旭川市民に井上文学の魅力を紹介することを通して、旭川出身の大作家を記念し、文化都市旭川の特徴としての働きをしていくことができました。入館者数減に悩むことも多くあります。しかし

どんな時でも、市民の皆さんに、文学を通して豊かな心と郷土への誇りを持ってもらいたいという館の理想は忘れたことはありません。

井上先生の書斎等の移築について多くの意見が寄せられました。そのほとんどが祝福と励まし声でした。多くの候補地の中から、なぜ旭川が選ばれたのかという問いもありました。その問いに対し

る答えは、井上先生自身が旭川に寄せてくださった思いと、当館が今まで歩んできた業績への信頼と評価、そして、これから井上先生の素晴らしい資料を保管整理し、それを活用した事業の充実への期待だと思えます。

当館は今、この期待にこたえていかなければなりません。職員一同、井上先生の書斎が旭川に来てやっばり良かった、と思つてもらえる活動をしていきたいと思つていきます。そのような日が一日でも早く来る事が出来るように、十分な準備をしていきたいと思ひますので、皆様方のご理解とご協力を心からお願ひ申し上げます。



(応接間)



(書斎)

第一回企画展

老いと死を見つめて

四月十一日(土)～六月二十一日(日)

《趣 旨》

井上靖は彼が六十歳になる頃から、老いや死といった、人生の晩年を迎える人なら誰もが直面する人間の根本問題をテーマとする小説を書くようになります。母の老者と死を見つめた『わが母の記』、死者(作者自身の声)との対話を通し死そのものと向き合った『化石』や『星と祭』、利休の死を扱った『本覚坊遺文』、著者畢竟の名作『孔子』といった井上靖最晩年の傑作群を紹介しました。

《展示の主な内容》

①社会への発言②老いを見つめて③見えてきた死の海面④利休の死に枯れかじけて寒い⑤孔子と天命

《展示を終えて》

晩年というのは豊かな実りを収穫する人生の秋です。井上靖の晩年、円熟した完成度の高い小説を、しっかりと読み直すよい機会でした。



第二回企画展

花の絵・花の詩 ～井上靖と東延江

六月二十七日(土)～九月六日(日)

《趣 旨》

井上靖の文学の出発は詩を作ることからでした。小説家として名をなした井上ですが、生涯詩作を続けており、詩人井上靖としての側面は、井上文学を理解する上で非常に重要です。

旭川在住の詩人・画家の東延江氏は、井上靖の詩や小説に描かれている草花を、美しい絵として数多く描いています。今回の展示では井上靖が詩の中で読んだ花と東延江氏がそれを絵として描いたものを展示し、花の詩と花の絵を鑑賞し

てもらいました。

《展示の主な内容》

①「詩人井上靖」②春の詩と絵③夏の詩と絵④秋の詩と絵⑤冬の詩と絵⑥「詩人東延江」

《展示を終えて》

井上靖は自然の風景や野山の草花を深く愛し、それらを詩や小説に美しく描いていく作家です。井上靖は絵画的感性を身につけた作家と言っても過言ではないと思います。今回の展示では東延江氏の協力を得て、その面を紹介できたことは幸いです。



第三回企画展

旭川ゆかりの歌人 齋藤瀏・齋藤史展

九月十二日(土)～十月十八日(日)

《趣 旨》

齋藤瀏は、大正から昭和初期にかけて旭川第七師団で勤務した軍人です。若いころから短歌を詠み、旭川では「歌話会」を発足させたり、白秋、牧水らを迎えたりしました。瀏の娘史(ふみ)は、若山牧水の旭川来訪をきっかけに短歌の世界に足を踏み入れました。史は生前多くの歌集を出し、平成九年には宮中の歌会始の召人にもなっています。若山牧水が旭川で書いた掛け軸の初公開とともに、齋藤父娘の短歌の足跡を紹介しました。

《展示の主な内容》

①齋藤瀏・史と旭川②齋藤瀏・史と二・二六事件③武将歌人・齋藤瀏④女流歌人・齋藤史―「魚歌」の誕生―戦後・長野にて

《展示を終えて》

この企画展は、「旭川文学資料友の会」との共催ですが、このような企画を通して旭川市内にある文学館同士の連携の大切さを確認できたよい企画展だったと思います。



第四回企画展

井上靖が描いた ヒロイン像

十月二十四日(土)～二〇一〇年一月十七日(日)

《趣 旨》

井上靖が描くヒロインたちはとても魅力にあふれています。清楚で美しく、一方ではひたむきで烈しい。しかしそのヒロインたちが心の奥深くに宿しているものは「孤独と寂しさ」です。それは井上の小説を読む者を強く惹きつける井上文学の本質です。今回の展示では、これらのヒロインの原型の問題、井上靖の女性観について、具体的な小説でのヒロインの描き方等を紹介し、井上作品を読む楽しさを味わってもらいました。

《展示の主な内容》

①ヒロイン像の原型②歴史小説の中で描かれるヒロイン③現代小説におけるヒロイン④映画化された井上作品

《展示を終えて》

井上靖は生涯多くの小説を書いてきました。登場人物も数知れませんが、井上はひとり一人の人物像を描くために渾身の努力をしてみました。特に女性像の印象は印象的であり、この企画展示では、多くのヒロインたちに出会うことができ、



井上靖最後の長篇小説『孔子』展

二〇二〇年一月二十三日(土)～三月二十八日(日)

《趣旨》

『孔子』は井上靖最晩年の長篇小説です。この小説の語り手(蔦菫)は、作者自身と言ってよく、井上の孔子観、天命観が描かれていると思われまふ。井上靖はこの小説を書くために二十年間構想し、準備しました。その時に残した「孔子ノート」の一部を初公開しました。井上が『孔子』を執筆していく背景や「論語」をどのように読んでいたかを覗える資料であり、来館者に喜んでいただけたら幸いです。

《展示内容》

①「今、なぜ孔子から井上靖が『孔子』に託した思い」②「孔子ノート」の紹介③「小説『孔子』の構成と内容」弟子が語る孔子の物語

《展示を終えて》

『孔子』は井上靖の最後の長篇小説です。井上が人生の終焉を見据えて何を書こうとしていたか理解する上で重要な作品です。井上製作の「孔子ノート」が現在どこに、どれほどあり、その内容はどのようなものか知りたいものです。その意味でも資料の分散・散逸を避けたいものです。



自主事業の概要報告

文学散歩

「鷹栖町の文学碑巡り」

とき/平成二十一年六月二十日(土)
見学先/丸山句碑の森、北野神社など
講師/平野武弘氏



文学出前講座 文学講演会

「宮沢賢治の世界」

とき/平成二十一年七月十一日(土)
ところ/井上靖記念館ラウンジ
講演/齋藤征義氏(北海道文学館理事)
主催/井上靖記念館
共催/財団法人北海道文学館
財団法人北海道教職員厚生会



夏休みおはなし会

・第一回
とき/平成二十一年七月二十八日(火)
講師/上森伸子氏
(旭川おはなしの会代表)

・第二回
とき/平成二十一年八月四日(火)
講師/福田洋子氏
(旭川こども富貴堂代表)

ロビーコンサート

とき/平成二十一年八月二十九日(土)
演奏/山口健氏(チェロ)
新町由美氏(伴奏)
朗読/塩尻曜子氏



井上靖 映像の世界

とき/平成二十一年十月十五日(木)
上映作品/「茶々 天涯の貴妃」

「旭川ゆかりの歌人」 齋藤瀏・齋藤史(ふみ)展 関連事業 「齋藤瀏・史の人と作品」

とき/平成二十一年十月十八日(日)
講演/西勝洋一氏(歌誌「短歌人」編集委員、同「かぎろひ」編集人)
共催/旭川文学資料友の会

親子で楽しむ本の世界

とき/平成二十一年十一月二十一日(土)
講師/高橋典枝氏
(おはなし「ばたぼん」)

平成21年度のあゆみ

- 4月11日～6月21日
 - ・第1回企画展
「老いと死を見つめて
～井上靖 晩年の小説」
- 5月16日
 - ・第1回井上靖講座
「井上靖 晩年の小説を読む
～『化石』から『孔子』まで」
- 6月20日
 - ・文学散歩
- 6月27日～9月6日
 - ・第2回企画展
「花の絵・花の詩
井上靖—東延江」
- 6月30日
 - ・井上靖記念館運営協議会
- 7月11日
 - ・文学館出前講座 文学講演会
- 7月28日
 - ・第1回夏休みおはなし会
- 8月1日
 - ・第2回井上靖講座
「井上靖 花の作品を読む」
- 8月4日
 - ・第2回夏休みおはなし会
- 8月29日
 - ・ロビーコンサート
- 9月12日～10月18日
 - ・第3回企画展
「～旭川ゆかりの歌人～
齋藤瀏・齋藤史（ふみ）展」
- 10月15日
 - ・井上靖 映像の世界
- 10月18日
 - ・企画展関連事業
「齋藤瀏・史の人と作品」
- 10月24日～1月17日
 - ・第4回企画展
「井上靖が描いたヒロイン像」
- 11月7日
 - ・第3回井上靖講座
「井上靖 ヒロイン像を読む」
- 11月21日
 - ・親子で楽しむ本の世界
- 11月28日
 - ・第1回文学講座
- 12月12日
 - ・第2回文学講座
- 1月26日
 - ・第2回井上靖記念館運営協議会
- 1月30日
 - ・第3回文学講座
- 1月23日～3月28日
 - ・第5回企画展
「井上靖 最後の長編小説
『孔子』展」
- 2月13日
 - ・第4回井上靖講座
「井上靖『孔子』を読む」
- 2月24日
 - ・大人のためのおはなし会

文学講座

・第一回

「井上靖 西域小説—狼災記から—」
とき／平成二十一年十一月二十八日(土)
講師／石本裕之氏
(旭川工業高等専門学校教授)

・第二回

「井上靖文学の魅力をさぐる」
とき／平成二十一年十二月十二日(土)
講師／片山晴夫氏
(北海道教育大学旭川校教授)

・第三回

「井上靖の万葉集『夜の声』補注」
とき／平成二十一年一月三十日(土)
講師／伊藤一男氏
(北海道教育大学旭川校教授)



大人のためのおはなし会

とき／平成二十二年二月二十四日(水)
講師／上森伸子氏
(旭川おはなしの会代表)



企画展関連事業

井上靖講座

・第一回

「井上靖 晩年の小説を読む『化石』から『孔子』まで」
とき／平成二十一年五月十六日(土)

・第二回

「井上靖 花の作品を読む」
とき／平成二十一年八月一日(土)

・第三回

「井上靖 ヒロイン像を読む」
とき／平成二十一年十一月七日(土)

・第四回

「井上靖『孔子』を読む」
とき／平成二十二年二月十三日(土)



平成二十二年度 事業のご案内

一 企画展

◇第一回企画展
「美の遍歴」

井上靖 美術エッセイ
四月十日(土)～六月二十日(日)

◇第二回企画展

「旭川の文学を育んだ佐藤喜一展」
六月二十六日(土)～八月一日(日)
共催 旭川文学資料友の会

◇第三回企画展

「井上靖と家族
～ふみ夫人を中心に～」
八月七日(土)～十月十一日(月)

◇第四回企画展

「『天平の薨』展」(仮)
十月十六日(土)～
二〇一一年一月二十三日(日)

◇第五回企画展

「『水壁』展」(仮)
二〇一一年一月二十九日(土)～
三月二十七日(日)

二 自主事業

◇文学散歩
六月十二日(土)

◇親子で楽しむ本の世界
六月二十六日(土)・十一月月上旬

◇夏休みおはなし会

七月二十八日(水)・八月三日(火)

◇ロビーコンサート

八月下旬(予定)

◇井上靖 映像の世界

十月下旬(予定)

◇文学講座(三回開催)

十月中旬～二〇一一年一月中旬(予定)

◇大人のためのおはなし会

二〇一一年二月下旬(予定)

◇井上靖講座(四回開催)
企画展の解説と文学入門



職員異動のお知らせ

▽転出

職員 紺野香織
嘱託職員 川下史歩
臨時職員 堺あゆみ
臨時職員 佐々木 暎

▽転入

館長 齊藤淳起
職員 近藤由香利
嘱託職員 葛西由紀
臨時職員 池田佳奈子

年度別入館者数

| 年度 | 人数 |
|-------|---------|
| 平成5年 | 12,703 |
| 平成6年 | 20,385 |
| 平成7年 | 16,599 |
| 平成8年 | 14,893 |
| 平成9年 | 14,639 |
| 平成10年 | 16,832 |
| 平成11年 | 15,848 |
| 平成12年 | 13,486 |
| 平成13年 | 11,450 |
| 平成14年 | 12,475 |
| 平成15年 | 13,496 |
| 平成16年 | 10,077 |
| 平成17年 | 7,772 |
| 平成18年 | 6,331 |
| 平成19年 | 7,267 |
| 平成20年 | 6,740 |
| 平成21年 | 6,003 |
| 総入館者 | 206,996 |

平成二十二年度 新事業

「井上靖の作品を読む集い」
を開催します。

井上靖邸の書斎、応接間等の移築が決定いたしました。これを機会に当館も事業や展示の一層の充実が望まれています。特に館主催による読書会に当館も要望が多く、今年度から井上靖の短編小説を中心に読書会を始めることになりました。

○内容

- ・井上靖の短編小説を読む
- ・当館職員による作品解説や井上靖ナナカマドの会会員による朗読など
- ・年間8回開催予定で、1回だけの参加も可能
- ・テキストは当館で用意

編集後記

「私は物心がついてからずっと、自分が生まれた旭川という町にも、自分が生まれた五月という月にも、理由のさだかでない誇りを感じていた」(幼き日のこと)

井上先生が旭川の町に持つてくれた思いを強く感じながら、この編集後記を書いていきます。数多くの名作が書かれた先生の書斎が旭川に移築されるということは、全国の井上文学ファンにとっても、旭川にとっても大変な出来事です。この館報の巻頭言に、浦城いくよさんが書いてくださった井上邸の思い出は、旭川の私たちがしっかりと受け継いでいかなければならないと思っています。

井上靖記念館新事業
井上靖記念館主催読書会
「井上靖の作品を読む集い」

開催年間予定

| | | |
|-----|-----------|-----------------|
| 第1回 | 5月29日(土) | 「輔佐官海軍」 |
| 第2回 | 6月10日(日) | 「科島の死」 |
| 第3回 | 7月17日(土) | 「竜の窟」 |
| 第4回 | 8月16日(土) | 「本多忠勝の家」 |
| 第5回 | 11月27日(土) | 「鏡」 |
| 第6回 | 12月18日(土) | 「鶴がはこんだ手紙(川童話)」 |
| 第7回 | 1月18日(土) | 「平船橋の窟」 |
| 第8回 | 3月19日(土) | 「小登壇」 |

井上靖記念館 970-0871 旭川市香取5条7丁目
TEL 0155-81-1158 FAX 0155-80-1300